

国語科学習指導案

日 時 令和6年 1月24日(水) 校内研

学 級 岩手大学教育学部附属中学校

2年C組34名

会 場 2C教室

授業者 中 村 正 成

1 単元名

「ショートショートを書こう」

2 単元について

(1) 学習者観

「読むこと」について、学習者は、重松清・作『タオル』では、登場人物の言動の意味や登場するアイテムが象徴することを考えることで、人物の心情の変化をより深く読み味わうことができた。また、夏目漱石・作『坊っちゃん』では、坊っちゃんを取り巻く多くの登場人物にスポットを当て、その人物の設定の工夫を追究することで、作品の魅力に迫ることができた。また、「書くこと」については、甲子園で岩手県代表が活躍する記事をもとにしながら、勝負事を魅力的に伝えるにはどうすればよいかを考え、新聞記事で書き表す活動を行った。

夏季休暇に、これまでの学習を生かして作文コンクールに応募するという課題を学習者に課した。学習者は、感想文や意見文、生活体験文など各々興味のあるコンクールに応募していたが、小説・物語やエッセイのコンクールを選択した学習者が全体の約4割と多く見られた。学習者の自由に創作したいという欲求を知ることができた一方で、自分の思いつくままに文章を進めている作品や、登場人物の設定が曖昧で内容を捉えるのが難しい作品が多く見られた。そこで、学習者の創作したいという気持ちを大切に、魅力的な作品に出あわせ、作品を分析させ、作家の思いやねらいを考えさせることで、自分のより良い作品作りに生かしたいと考えた。

(2) 学習材観

中心学習材 『絶句』(杜甫)、『黄鶴楼送孟浩然之広陵』(李白)、『春望』(杜甫)

『夏の葬列』(山川方夫)(伝え合う言葉 中学国語2 教育出版)

『絶句』、『黄鶴楼送孟浩然之広陵』、『春望』は、漢詩に初めて触れる初心者でも比較的理解しやすい唐詩である。『絶句』は、起句・承句で色彩を効果的に用いて美しい景色を歌う一方で、転句・結句で自分の寂しい心情を見事に対照的に表現している。『黄鶴楼送孟浩然之広陵』は、起句・承句で友が黄鶴楼を去る状況を説明した後に、友の乗る船が遠く地平線に消える様子を見守る別離の心情を歌い上げている。『春望』は、対句を効果的に活用しながら、家族と別れて暮らさざるを得ない自分の境遇を物悲しく歌っている。これらの漢詩からは、美しい情景や物悲しい心情の描き方や絶妙な言葉選び、また起承転結の構成の効果を学ぶことができる。

『夏の葬列』は、1962年に山川方夫が発表した短編小説である。数年ぶりに海岸の小さな町を訪れたサラリーマンの男は、葬列を偶然に目にし、戦中少年時代にこの町で経験した苦い思い出を思い出す。彼は少年時代、この場所で敵の艦載機が現れたときに、自分自身が生き残るために、同じ疎開児童のヒロ子さんを突き飛ばしたのである。彼はその後のヒロ子さんがどうなったか分からずにいたが、目の前の葬列に続く子どもたちとのやりとりから、ヒロ子さん、そして彼女の母親の死とも無関係ではなかったということを知り、それを背負って生きていかなければならないということを悟る。主人公の感情の起伏の描き方もさることながら、現在と過去との交錯、人称の使い分け、巧みな比喻表現や情景描写など、ショートショートの鬼才とも言われる山川方夫の見事の書きぶりに読者は引き込まれていく。

学習者には、自分でショートショートを書くときに、小説の基本である起承転結をおさえるとともに、場面の設定の仕方、表現の工夫などを通して、自分が伝えたいことを効果的に表現させたい。そのモデルとして、唐詩3句と『夏の葬列』は有効な学習材であると言える。学習者には、作者の工夫やその工夫の意図を十分に分析させて、自分の作品作りに役立たせたい。

(3) 教科研究との関わり

本校国語科では、育成を目指す知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、人間性等を次のように整理している。その育成のためにどのように指導を展開していくかを以降に示す。

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
社会生活に必要な知識や技能を身につけ、言葉を吟味して場に応じて適切に表現する力	批判的に言葉を検討しながら、状況に応じて論理的に考えたり伝え合ったりする力	言葉の価値を探るために、自ら探究の文脈を設定しながら課題解決に向けて協働する力

① 個別最適な学びと協働的な学び（授業デザイン・単元等学びのプランの共有）

本単元は、「ショートショートを書く」という書く学習を最終的なゴールに設定している。前述のように、学習者は「書きたい」という意欲はあるものの、それを表出する方法についてはあまり意識できていない。そこで、本単元では、実際にショートショートを書く前に、書くための視点を中心学習材から学ぶ活動を配列した。第1次では、「ショートショートを書く」ための単元の見通しをもつ。第2次では、唐詩を学ぶことを通して、主に小説や物語の構成の基本である起承転結や情景描写、言葉の選び方についておさえる。第3次では、主に場面の流れの工夫や人称の使い分けの工夫についておさえる。第4次で、第2次・第3次で学んだ小説を書くときの工夫を用いながら、ショートショートを書く。これにより、単体で唐詩や小説を読むよりも、自分が実際に書くということを意識して中心学習材を読むため、より主体的に学習する姿が期待される。

各学習材を読む学習では、なぜその作品が魅力的か、どのような工夫によって、どのような効果をねらっているかを考えさせる。その際には、個人の考えを大切にしながら、グループでの練りあい、また、全体の交流を通して多くの考えに触れさせたい。加えて、それぞれの学習材の魅力は多様であることから、学習者にある視点をもって自由に作品を読ませ、それを伝え合う活動を設定したい。この学習時間の設定により、個のレベルに応じた学習機会を与えるとともに、それらを伝え合うことで、作品の魅力の新たな発掘・発見につなげていきたい。

② 教科等横断的資質・能力の育成

本単元第2次と第3次において、作品の魅力を伝え合う言語活動を設定している。第2次では、唐詩3句で学習したことを生かして、好きな漢詩を伝える活動、第3次では、自分の好きな読みの視点（情景描写の用い方、登場人物の設定の仕方、比喻表現の用い方、伏線、指示語の用い方など）から『夏の葬列』の魅力や作者の工夫・意図に迫る活動である。このとき、自分が追究したことを視覚的に分かりやすくプレゼンシートにまとめることとする。自分が調べたことをポスターやレポート、ワンペーパーに表現する活動は、本校では国語科に留まらず、他教科・他領域でも頻繁に行われている。今回のこの学習活動は、まとめ方に主眼を置いたものではないが、伝えることを意識してまとめさせ、他の学習でも学習者が意識できるようにさせたい。

加えて、本単元の目標にある、「構成・論理の展開」や「表現の工夫」については、今後多くの表現活動を行うであろう学習者にとっては、国語科に留まらずに様々な教科で発揮してほしい資質・能力と言える。「ショートショートを書く」ということで終わらず、この学習活動が今後どんな学習活動に生かせそうかを意識させて単元を展開していきたい。

3 単元計画

(1) 単元の見通し

【知識及び技能】

- 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を理解することができる。((3)イ)
- 抽象的な概念を表す語句の量を増すと同時に、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。((1)エ)

【思考力、判断力、表現力等】

- ・ 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることができる。(C (1) エ)
- ・ 伝えたいことが分かりやすく伝わるように、段落相互の関係などを明確にし、文章の構成や展開を工夫することができる。(B (1) イ)
- ・ 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。(B (1) ウ)

【学びに向かう力、人間性等】

- ・ 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

(2) 本単元における言語活動

- ・ 漢詩や小説を読み、読み深めたことをまとめて伝え合う活動。
(関連：【思考力・判断力・表現力等C (2) イ】)
- ・ 漢詩や小説で学んだことを生かして、物語を創作する活動。
(関連：【思考力・判断力・表現力等B (2) ウ】)

(3) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知っている。 ((3) イ) ② 抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。 ((1) エ)	① 「読むこと」において、観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えている。 (C (1) エ) ② 「書くこと」において、伝えたいことが分かりやすく伝わるように、段落相互の関係などを明確にし、文章の構成や展開を工夫している。 (B (1) イ) ③ 「書くこと」において、根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫している。 (B (1) ウ)	① 物語を創作するために、他の学習者と共に文章の展開や表現の効果について考え、粘り強く文章を読んだり書いたりしようとしている。

(4) 指導の計画

次	時	学習内容	関連する評価の観点			評価方法
			知技	思考	態度	
1	1	(1) 単元の見通しをもつ。 (2) 「絶句」を読み、作者の表現の意図について考える。	①			(学習課題)「唐の詩人はどのように言葉を選んでいるか」について、作者がその言葉を選んだ理由を多角的に理解している。 【学習シート】
	2	(1) 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」「春望」を読み、表現の特徴に着目しながら情景や作者の思いを考える。	①			(学習課題)「唐詩にはどのような表現や構成上の工夫があるか」について、作者の言葉選びの工夫や漢詩の段落構成について理解している。 【学習シート】
	3	(1) 任意の漢詩を選び、表現の特徴に着目してプレゼンシートにまとめる。		①	①	(学習課題)「お気に入りの漢詩の素晴らしさをクラスメイトに伝えよう」について、1・2での学習を生かしながら表現や構成に着目して漢詩の魅力を伝えてい

						る。【プレゼンシート】
	4	(1) プレゼンシートを用いて、それぞれの漢詩の良さを読み味わう。			①	(学習課題)「お気に入りの漢詩の素晴らしさをクラスメイトに伝えよう」について、プレゼンシートを用いて意欲的に漢詩の魅力を伝えたり、他の漢詩の素晴らしさを理解したりしようとしている。 【観察・OPPシート】
3	5	(1) 「夏の葬列」を読み、初発の感想を交流し、読み深める見通しを立てる。 (2) 過去と現在が交錯する展開となっていることに気付く。				※ 本時は、【思考・判断・表現】C(1)エに基づいて学習状況を捉えて指導を行うが、単元の目標としていないことから、本単元の評価には含めない。
	6	(1) 過去と現在が交錯することによって、どのような効果があるかを考える。		①		(学習課題)「現在と過去が交錯することで、どのような効果が生まれるか」について、場面の役割などを考えながら、時間軸を交錯させる効果を述べている。 【学習シート】
	7 本時	(1) 主人公の人称を使い分けることによる効果を考える。		①		(学習課題)「作者はどのような意図で主人公の人称の使い分けを行っているか」について、用いられている場面や表現に着目して、人称の使い分けによる効果を述べている。 【学習シート】
	8	(1) それぞれ読み深める視点を持ち、「夏の葬列」の表現の効果等について考え、プレゼンシートにまとめる。		①	①	(学習課題)「『夏の葬列』が魅力的な作品である理由をクラスメイトに伝えよう」について、自分なりの視点を持ちながらその魅力を伝えている。 【プレゼンシート】
	9	(1) プレゼンシートを用いて、それぞれが読み深めたことを交流する。			①	(学習課題)「『夏の葬列』が魅力的な作品である理由をクラスメイトに伝えよう」について、プレゼンシートを用いて意欲的にその魅力を伝えたり、他の視点から見た魅力を理解したりしようとしている。 【観察・OPPシート】
4	10 11	(1) 第2次や第3次の学習を生かしてショートショートを書く。	②	②		(学習課題)「漢詩や『夏の葬列』で学んだことを生かしてショートショートを書こう」について、構成を意識してショートショーを書いている。 【作品】
	12	(1) 書いたショートショートをグループで読み合い、展開の仕方や表現の工夫について改善を図る。		③	①	(学習課題)「構成や表現を吟味して、ショートショートを練り直そう」について、お互いに作品を読みながら、構成や表現に注意して推敲している。 【作品・OPPシート】
	13	(1) 完成したショートショートをクラスで読み合い、鑑賞する。 (2) 単元を振り返る。			①	(学習課題)「クラスメイトの作品を読み、これまでの学習を振り返ろう」について、クラスメイトの作品の工夫を読み味わうとともに、これまでの学習の成果を振り返っている。 【観察・OPPシート】

4 本時について

(1) 指導目標

作者の表現の工夫とその効果・意図について気付かせる。

(2) 評価規準

【思考・判断・表現】

- ① 「読むこと」において、観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えている。(C (1) エ)

(3) 授業構想

学習者は『夏の葬列』に初めて触れたときに、「自分自身が主人公の『俺』のように重たい気持ちになる」という作品の醸す重苦しい雰囲気を感じる一方で、「わくわく感が出る」といった読者を惹きつける魅力について感じていた。このように苦しい話だが読んでみたくなるのは作者のどんな工夫によるものだと予想されるかを学習者に問うたところ、①「過去と現在が交錯する場面展開の工夫」、②「主人公の人称の使い分け」、③「比喩表現などの巧みさ」などを挙げていた。そこで、前時は、①「過去と現在が交錯する場面展開の工夫」を採り上げた。時系列に並べたバージョンと小説を比べる学習活動を行い、同じ場面であっても順序を変えることで場面や表現の意味合いや主人公の心情が変わることや、このあとどうなるかという読者を引き込む効果について気付かせることができた。本時は、②「主人公の人称の使い分け」による効果を考える時間である。

導入では、前時までの学習を振り返るとともに、学習課題を提示し、人称の使い分けがどのような効果を与えており、そこには作者のどのような意図があるかを考えていくことを確認する。

展開前半では、グループで学習課題を追究していく。ここで、学習課題へのアプローチとして、次の3点が考えられる。一つ目は、作品に表れるそれぞれの人称「彼」「俺」「僕」「自分」がどのような場面でどのように用いられているか考え、その傾向をつかみ、その効果を考えるものである。この分析により、それぞれの人称に表れる主人公の心情や設定に気付くことができると予想される。二つ目は、作品に表れる人称をいずれか一つに統一して読み、原作との違いを考えるものである。この分析により、あえて客観的な「彼」と極めて主観的な「俺」を同時に表す効果に気付くことができると思われる。三つ目は、他の作品の人称の使い方を比較することによって、その効果や意図を考えるものである。この分析により、主人公を読者にどのように見せるかという視点に気付くことができると思われる。また、本作品の独自性から考えることができると予想される。これらのアプローチの仕方を、グループに選択させ追究させていく。この後、全体で共有することを意識させ、自分たちの読みがクラス全体の読みを深めることにつながることを意識させたい。読解・まとめ方については、教科書へのライン引きや学習シートへの書きこみ、シンキングツールでのまとめ、デジタル教科書への書き込みなど、自由度を与えたい。課題への様々なアプローチが、多様な解釈・発見につながることを期待したい。

展開中盤では、それぞれのグループで考えた読みを全体で共有する。それぞれの人称のもつ意味や人称を使い分けることの効果を全体で発表しあう。ここでは、追究の仕方によってグループでは気づきに違いがあると考えられるため、その点に着目させながら他のグループの発表に耳を傾けさせたい。一つ目、二つ目の分析からは、特に基本的に「彼」と表現される主人公が、ヒロ子さんの死に関わる心情のときには「俺」となっており、直接的で感情が高ぶっていることに気付くと予想される。これにより、主人公がヒロ子さんの死にこだわり続けていることが強調され、読者がそんな主人公に共感（あるいは嫌悪感）を抱きながら物語に引き込まれていく効果が生まれるということに気付くと予想される。三つ目の分析のグループからは、例えば『少年の日の思い出』の後半部分から、「僕」という人称の使い方、読み手が主人公に感情移入できるということから、『夏の葬列』の場合には、あえて客観的な『彼』を用いることの特異性を見出すことができると思われる。

展開後半では、特に他作品との比較をもとにしながら、なぜ主人公を「彼」と表現する必要があったのかを考えさせたい。もし、ヒロ子さんの死に感情的で独りよがりな主人公を強調するのであれば、1年次に学習した『少年の日の思い出』の後半のように一人称小説にしてしまうとよい。あえて「彼」という人称を用

いたのはなぜかを改めて問いたい。考える手立てとして、主人公を客観視しなければならない意味やこの小説を通して筆者が何を伝えたかったのかを考えさせたい。

終結では、本時で学んだ表現の工夫について学んだことを振り返らせたい。特に、この後は個人で視点を設けて読み深めるとともに、学習を生かしてショートショートを書くことになる。その際に参考になりそうな本時の気づきをまとめさせ、次時の学習に生かしたい。

(4) 本時の展開

段階	学習内容および学習活動 予想される学習者の反応等	指導上の留意点および評価 ・指導の留意点 ○評価
導入 5	1. 前時までの学習を振り返る。 2. 学習課題を確認し、学習の見通しをもつ。	
展開 40	【学習課題】 作者はどのような意図で主人公の人称の使い分けを行っているか	
	3. グループ内で、それぞれの人称の使い分けの効果を分析する。 分析① 「彼」「僕」「俺」「自分」が具体的にどのような場面に用いられ、どのように使われているか、その傾向をつかみ、その効果や意図を考える。 分析② 文中に表れる人称を「彼」「俺」など一つに置き換え、原作と比較して、その効果や意図を考える。 分析③ これまでの学習した『少年の日の思い出』『坊っちゃん』『蜘蛛の糸』の人称の使い方と比較して、その効果や意図を考える。	・グループで分析の方向性を確認する。 ・必要に応じて、中学校1年の教科書を活用する。 ・状況に応じて、異なる分析方法で追究しているグループの様子を知らせる。
	分析①【予想されるそれぞれの人称の用いられ方の傾向】 ○「彼」 ・第三者視点として語る。 ・淡々と事実を語る。 ・自分を客観視しているとき。 ・様子や行動を客観視している。 ○「僕」 ・昔の記憶の会話で用いられる。 ・主に第二場面で用いられる。 ・幼さ。純粋さ。 ○「俺」 ・主人公の思いが高まるとき。 ・ヒロ子さんの死に対して自己中心的な心情。 ・ヒロ子さんの死を自分の責任と思いたくない心情。 ○「自分」 ・自分を反省しているとき。 ・主人公の思いを客観的に見ている。 ・冷静に自分を見ている。 ・多用されない。	

	4. 全体でそれぞれのグループが分析した人称の用いられ方を交流し、使い分けの効果を考える。 【予想されるそれぞれの人称を使い分ける効果】 ・過去の自分と現在の自分をはっきりと分ける効果。 ・主人公を「彼」と呼び、淡々と語ることで、小説の中の不気味な雰囲気を醸し出す効果。 ・「俺」のヒロ子さんの死を自分の責任と思いたくない気持ちをリアルに描き、読者を共感させる（共感させない）効果。 ・純粋な「僕」と独りよがりな「俺」を対比する効果。 5. なぜ、この小説で主人公を「彼」と表現しているのかを考える。 【予想される「彼」を用いる理由】 ・あえて客観的な「彼」を設定し、そこから「俺」を見ることで、状況に踊らされる主人公を滑稽に見せるため。 ・状況に踊らされながらも不幸にも二人の死に関わっていた主人公を客観的に見ることで、戦争に人生を狂わされた主人公への同情を誘っている。 ・人間は苦悩からは逃れることはできず、それを真正面から背負って生きていくということを、最後の一行で「彼」という人称を用いて一般的に描いている。 6. これまでの学習を受けて、人称を使い分けている意図を個人でまとめる。 【予想される人称を使い分ける意図】 ・独りよがりな「俺」と、客観的な「彼」を用いることで、主人公のヒロ子さんの死への思いを強調する意図。 ・ヒロ子さんの死と自分は無関係だという主人公の思いに読者を共感させる（させない）意図。 ・「俺」という人称で語らせることで、主人公が二人の死をから逃れられずそれを受け入れて生きる覚悟をしたことを印象づける意図。 ・状況に踊らされる主人公を客観的に描くことで、過去の傷からは逃れられないという人間の生き方を象徴的に描き伝える意図。	・手がかりとして、「彼」と「俺」を対比させなければならぬ理由、作者は主人公を読者にどのように捉えてほしいか、この小説を通して作者は何を伝えようとしているかを考えさせる。 思○「読むこと」において、観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えている。 【学習シート】
終 結 5	7. 学習を振り返る。 【期待する学習者の振り返り】 ・人称も小説で何を伝えたいかによって変化することが分かった。以前自分が書いた小説では、名前を設けていたが、逆につけなくても読者に伝えることができると分かった。主題も併せて考えたので、次の時間は主題に関わる表現を探してその特徴に迫りたい。	・本時の学習内容を振り返るとともに、これまでの学習活動の振り返りや今後の学習活動への見通しをもたせたい。

参考文献

清野隆（2017）『『夏の葬列』の作品理解との位置付けの歩み』

杉井和子（2021）「山川方夫の『夏の葬列』論——自己と対峙する風景——」